

高温及び少雨に対する対応について

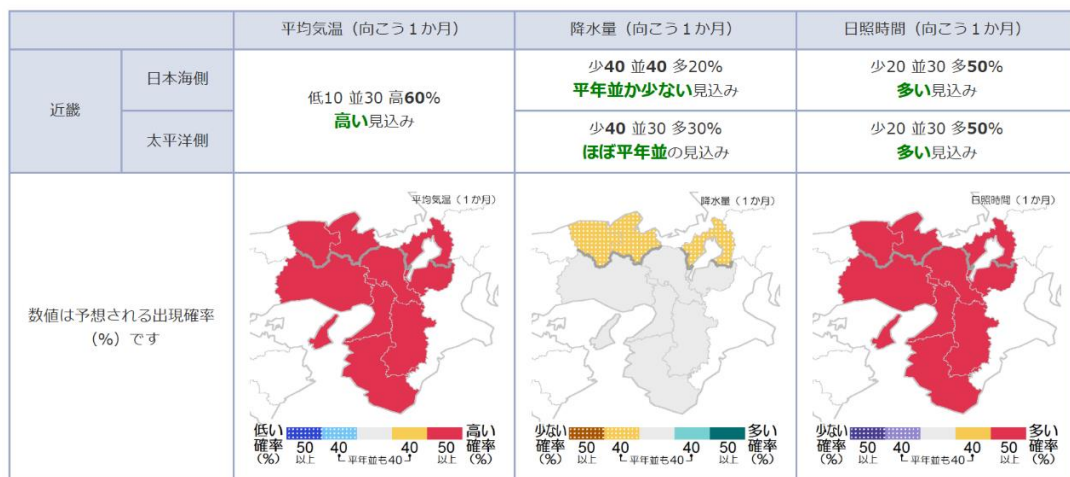
気象庁発表によると向こう1か月（7/19～8/18）の気温は高く、降水量が少ない見込みですので、水の管理や農作物の管理などご注意ください。また、農作業中の熱中症対策に十分注意いただくようお願いします。

1 降水量と気温等の状況（7/27時点）

県内の降水量および気温（前30日間）について、降水量は85mm（平年比42%）、平均気温は28.0℃（平年比+2.8度）となっている。降水量（前30日間）は、豊岡で平年比10%となるなど、日本海側では特に少ない日が続いている。

2 今後の気候の見通し

- ・気温は暖かい空気に覆われやすいため、特に期間のはじめはかなり高くなる見込み。
- ・日本海側では、向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込み。
- ・太平洋高気圧に覆われやすい時期があるため、向こう1か月の日照時間は多い。



（向こう1か月予報）

3 高温及び少雨に対する対策

（1）栽培管理上の留意点と対策

ア 水稻

【高温対策】

- ・高温により稲の生育や出穂が早まる恐れがあるため、穂肥診断を的確に実施し、適正施用に努める。肥効調節型肥料の溶出が高温により早まるので、出穂までに葉色が極端にさめた場合は追肥を検討する。
- ・強い中干しは避ける。

【少雨対策】

- ・幼穂形成期に備えて、水路の点検、畦畔の漏水防止等を行う。
- ・水路からほ場へかんがい水を流入させる際、下流への漏水がないよう止水を確実にを行う。
- ・幼穂形成期には、かけ流しを避け、間断かん水により、田面を乾かさない。

- ・穂ばらみ期～開花期は、特に水を必要とするため、かん水回数を増やし、田面を湿潤に保つ。

【病害虫対策】

- ・高温年次は斑点米カメムシ類が多く発生する傾向にあるので、畦畔の草刈りを出穂の2週間以上前までに終わるとともに、農薬の使用基準を遵守して適期防除を行う。周辺のは場よりも出穂が早いほ場は、イネカメムシの被害を受けやすくなるので、出穂期に防除を行う。
- ・詳細は、7月17日発表の令和7年度病害虫発生予察注意報第1号(<https://bojo.hyogo-nourinsuisangc.jp/archives/1384>)を参照する。

イ 大豆

【少雨対策】

- ・畝間にかん水する場合は、走り水としほ場の端まで水がいきわたったらすぐに排水し、滞水しないようにする。
- ・開花始期から子実肥大期にかけての干ばつによるかん水不足は、落花・落莢を引き起こし、青立ちの原因となるので、状況に応じて畝間かん水、地下かん水を行う。
- ・ただし、かん水は気温が高い日中をさけ、早朝もしくは夕方に行う。
- ・急激に水を入れると根に負担がかかり、立枯性病害、特に茎疫病にかかりやすくなるため、上記の畝間かん水、水を溜めないことは、立枯性病害防除に重要である。

【病害虫対策】

- ・アブラムシ類、ハダニ類、アザミウマ類、ハスモンヨトウ、カメムシ類の発生に留意し、適期防除に努める。

ウ 野菜

【高温対策：施設】

- ・施設では、屋根面および側面への遮光（遮光率50%程度、遮光期間は施設内の光量により調整のこと）・遮熱資材の展張、あるいは遮熱塗料の塗布により施設内温度、葉温、果実温の上昇を抑制する。
- ・つま面・側面を可能な限り開放して換気し、循環扇等を活用し、外気を施設内へ送風する。細霧冷房やヒートポンプの導入により、施設内温度の上昇を抑制する。
- ・早朝や夕方に葉面散水を実施する。マルチ資材・防草シートを敷設している施設で湿度が極端に下がる場合は、床面散水を行う。

【高温対策：施設・露地共通】

- ・土壌水分の蒸発、地温上昇抑制に、白・シルバー等マルチ資材を敷設する。また、マルチ資材の有無にかかわらず、厚めに敷きわらや敷草を行う。
- ・少しでも気温が低く、品温が低い時間に収穫するとともに、予冷库がある場合はこれを活用して品質低下を防止する。
- ・果菜類では、果実への直達光を軽減するため、過度の摘葉は控える。

【少雨対策】

- ・施設では、草勢低下防止のために少量多回数のかん水・施肥体系を取る。露地で畝間かん水を行う場合は、地温が低下した日没後または早朝に実施する。

- ・除草の際は、抜くより刈るなど、過度の除草は控え、耕うんによる土壌の乾燥助長は控える。

【その他】

(夏野菜)

- ・高温少雨により果実の伸びが悪く、日焼けが発生しやすくなるため、早めの収穫に努め、変形果等は積極的に摘果し、樹勢の維持を図る。

(秋野菜)

- ・耕土の深さや水利の利便性を確認しては場を選定する。発芽不良や活着不良に備えて種子や苗量を多めに確保し、播種が遅れた場合は作型・品種を変更できるよう事前に十分検討する。
- ・播種する場合は、播種前に十分かん水し、播種後はべた掛け資材や敷きわらにより高温乾燥を防ぎ、発芽を促進する。
- ・用水が確保できない場合は、降雨を待ってから播種するか、移植可能な品目は別の場所で集約して育苗し、移植する。
- ・苗を移植する場合、かん水後も鉢土が露出しない程度の深さに植える。定植から14日までを目途に、活着促進と初期生育の確保のため、手かん水、スプリンクラー、散水チューブで株元へしっかりとかん水する。その後も、土壌が乾ききる前にかん水を実施する。

【病虫害対策】

- ・薬剤散布は、高温で薬害を生じやすくなるため、朝夕の気温が低い時間帯に実施する。
- ・高温乾燥下では、アブラムシ類、アザミウマ類、ハダニ類、カメムシ類、ヤガ類の発生が助長されるため、定期的に防除を行う。
- ・高温のため、排水不良や水はねにより病害が助長されるため、排水対策も徹底しておく。

エ 果樹

【高温対策】

- ・ぶどうでは、着色を促すため一部被覆を除去する。
- ・温州みかんでは、日焼け果防止として、炭酸カルシウム剤の散布や直射光の当たる外成り果実を摘果する。
- ・高温によって熟期が早まる樹種（ぶどう、いちじく、もも、なし等）では収穫時期に注意し、収穫は果実品温の低い早朝に行う。収穫後はできる限り気温の低い所に置き、冷蔵庫や予冷库のある場合は効率的・効果的に活用する。

【少雨対策】

- ・土壌水分保持と地温の上昇抑制のため、地表面を裸地状態にせず、敷草・敷わら等のマルチを行う。
- ・かん水は、土壌が乾き切らないよう早めに行い、地温の下がる夕方から夜間に実施するのが望ましい。
- ・かん水用の水量が不足する場合は、局所的に点滴かん水を行うなど、効果が上がるよう工夫する。
- ・温州みかんでは、昼間に葉が巻く状態を目安にかん水を始める。着果過多樹は早期に仕上げ摘果を行い、樹勢低下を防ぐ。

オ 花き

【高温対策：施設】

- ・葉焼け等の高温障害回避のため、遮光資材を展張する。過度な遮光は軟弱徒長を引き起こすため、展張の時間帯は日中 10 時頃から 15 時頃までを目安とする。
- ・天窓や側窓、施設のサイドを開放して換気し、施設内温度の低下を図る。さらに、換気扇や循環扇を利用し強制換気を行う。
- ・切り花類の土壌、苗もの・セル苗の用土とも、過乾燥にならないようこまめにかん水する。特に、定植直後や生育初期のものは注意する。

【高温対策・少雨対策：露地】

- ・土壌が過乾燥にならないよう注意する。畝間かん水を行う場合は日中を避け早朝か夕方に行い、湛水状態は短時間にとどめる。

【病虫害対策】

- ・高温・乾燥条件で発生しやすいハダニ類、アザミウマ類やアブラムシ類等の発生動向に十分注意し、ほ場内外の除草とともに適期防除に努める。
- ・きく、カーネーション等では、タバコガやヨトウ類が発生しやすくなるので注意する。

（２）農業用水の渇水対策

- ・水路や畦畔等から漏水がないか点検し、漏水がある場合は至急補修する。
- ・水源の状況を確認し、状況に応じて早めに取水制限を行うなど、水利用の調整に努める。
- ・可能な地区にあつては循環かんがいや反復利用を行うなど、農業用水の有効活用に取り組む。
- ・井戸などの他の水源利用の可能性について検討するなど、早めに渇水への対応を準備する。

※ 干害の応急対応として、近畿農政局に災害応急用ポンプの無償貸出制度有。

田面の亀裂の復旧などには、干ばつ災害復旧事業が活用できる場合有。

（３）農作業中の熱中症対策について

大阪管区气象台から、長期間の高温に関する近畿地方気象情報が発表されており、農作業中の熱中症発生リスクが高まっている。このため、こまめな休憩と水分補給や空調服など熱中症対策アイテムの活用等の熱中症対策を実施して、健康管理に十分に注意する。